



学校名：東京都立田柄高等学校

氏名： 田中 聖子

● 実践教科等：コミュニケーション英語Ⅰ

● 時間数：9 時間

● 対象生徒：高校 1 年生

● 対象人数：195 名(5 学級)

MONGOLIA

【担当教科：外国語(英語)】

※複数の単元で授業を実施したため、単元名①および②として記載した

1-①単元名

Brightening the Future(未来を照らしながら)

※教科書“Grove English CommunicationⅠ”第5課 導入部分

2-① 単元の目標 (ESD の能力・態度)

- (i) 自分たちの国のことに目を向ける一方で、持続可能な社会の実現においては地域や世代を多様な事柄が公平・平等にいきわたるために、自分たちにはなにができるか考える【批判的に考える力】
- (ii) さまざまな角度から物事を思考し、高校生である自分たちにできることは何か、また今後の未来像を予測してより良い解決策はどんなことが可能であるかを主体的に考えまとめる【未来・将来を見据えて、予測に基づき考える力】
- (iii) 現在、開発途上国が抱えている諸課題に対し意見交換し、まとめることを通じてモンゴルについての理解を深める【他者と協力する力】
- (iv) 日本とモンゴルの相互依存の関係に気づき、現状を知る【つながりを尊重する態度】

3-① ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・「モンゴル」という開発途上国の現状を知り、相互理解をしていくことの肝要さに気づく(多様性)
- ・各種情報も各国の教育も循環したり、変容したり、お互いに高めあっている現状を知る(相互性)
- ・日本と開発途上国が山積している課題に対し、力をあわせ協働していることを知る(連携性)

4-① 単元の指導について

(1) 教材観

単元中の本文においては、モンゴルの電力事情と大気汚染という問題に対し、高校生ができることを考え実践に移すという内容が主軸にある。ESD(持続可能な発展のための教育)に基づく授業を通して生徒が物事を多面的にとらえることができるようになってほしいという願いをもち、構成した。自分たち高校生にも一歩を踏み出すことができ、さらに国際社会の中で広く活躍し、役割を果たすことができるという有用感を感じさせ、主体的に考える視点をもつことに重点をおいた。

(2) 児童生徒観

外国につながる生徒が多数在籍している学校のため、普段の授業はもちろん、あらゆる学校生活の場面においても、異文化理解・国際理解、国際交流など、外国に目を向ける機会が非常に多い点が本校の特徴である。とくに本校普通科外国文化コースでは、外国につながる生徒の割合は高く、生徒の中にも JICA の活動について理解が深かったり、ボランティア活動に積極的に携わりたい気持ちをもつ者が一定数いたり、今回の教師海外研修に基づく授業に対して非常に積極的であった。

(3) 指導観

国際社会に貢献する生徒の育成をめざし、開発途上国の現場・現状を伝えるだけでなく、教師から還元される内容を生徒たちのなかで理解を深め、何らかの形で自ら発信できるような場を設定するよう授業を構成した。授業の内容に連続性をもたせるため、今後 3 学期までかけて、「国際協力」などのキーワードを念頭に、総合的な学習の時間やホームルームの時間を有効活用し、今回の学びが単発のものにならないようにする。

5-① 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	意欲・関心を示し、意欲的な態度をもって授業に臨んでいる。	めあてをもって取り組み、意見をまとめたり考えを深めたりしている。	自分の考えをまとめ、相手に伝わるように伝達できる。	「継続した支援」「相互依存」などキーワードの理解をし、適切に用いる。
評価方法	観察・ワークシート	ワークシート	発言・感想文	アンケート・発言

6-① 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	【モンゴルについて理解を深める】国の概要・支援の内容などを知り、自分たちにできることの意見をまとめる。	・電力問題・大気汚染など多くの課題と向き合うモンゴルの現状を的確にとらえる。 ・JICA 事業の現地への関わりを知る。	①JICA およびモンゴルという国についての理解を深める。 ②モンゴルを支援するには、どのようなことが考えられるか意見をまとめる。
2～7	教科書 5 課 “Brightening the Future”の本文内容理解・文法事項の学習・音読・ふりかえり		

7-① 授業事例の紹介

小単元名【モンゴルについて理解を深める】

(1) 指導案

(ア)実施日時 9月10日(水)第3限他 ※授業外の文化祭での展示は9月19日(金)～20日(土)

(イ)実施会場 1年4組教室他

(ウ)本時の目標 モンゴルの概要・日本の支援・JICA の活躍などを知る。

(エ)指導のポイント 導入段階で国の理解を深め、スムーズな本文内容理解につなげる。

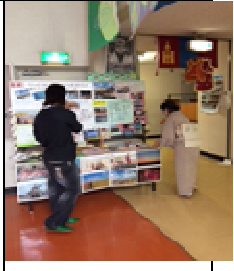
(オ)本時の展開 スライドや写真等視聴覚教材を積極活用し、国の概要についてはもとより、モンゴルを取り巻く支援のあり方及び抱える課題について深く知る。

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 10分	導入1 導入2	・フォトランゲージ 1 たいようばし(ウランバートルにおける無償資金協力) 2 ゴミ処理施設(ウランバートルにおける技術協力)	一斉および班活動・発表	使用写真の選定 地図の活用 1 わかりやすく理解しやすい説明と平易な英語 ・ワークシートのレイアウトの工夫 2 視聴覚教材の活用 ・訪問した新モンゴル高校2年生数人と大学生同行者(ケル滞在時)の英語での発話の内容を聞き取る。 3 現地調達の教材 ・現地の貨幣および国独自のお茶“スーテーツァイ”試飲など 4 スライドとプリント等	態度 発言 ワークシート 感想文 アンケート 等
展開 30分	1 研修の目的 2 JICAの活動 3 国についての理解深化 ・言語 ・通貨 ・気候 ・民族衣装 ・地方と首都の比較 ・環境問題 ・各国からの支援の様子など	・モンゴルはどんな国か。 1 「モンゴルのイメージ」を共有する/JICAの支援紹介 2 モンゴルの場所や首都の確認等…地図・スライド等を用いて位置関係・民族衣装・通貨等について幅広く伝える。 3 英文を取り入れた活動 ・英語による教師の説明聞きとり&書き取り 等 ・クイズなどのアクティビティ ・モンゴルの高校生の英語の聞き取り等			
収束 10分	ふりかえり 次時の予告	・JICAの活動の確認 ・感想等の発表活動 ・モンゴルが抱える深刻な大気汚染の問題をはじめとする環境問題について予告をし、ワークシートを回収する。		教科書の挿絵の拡大写真(5課) ワークシート	



Would you like more "suutei tsai"(salted milk tea)?



授 業 外	飛翔祭(文化祭)における教師海外研修参加報告(モンゴルの概要とJICAの活動について)	学年既習事項であるモンゴルの環境に関する情報・首都と地方の格差問題といった国の概要から、JICAの支援、民族品コーナーの設置、関連書籍の紹介等、多角的に展示方式で紹介する。	展示	興味をもった生徒・来校者の質問に答えたり、研修での学びを伝えたりすることの時間を設け、国際問題、国際協力の必要性に気づく生徒らに対し働きかける。	
-------------	---	--	----	--	---

※単元①については以上

1-② 単元名

JICA ～青年海外協力隊の活躍～

2-② 単元の目標 (ESDの能力・態度)

- (i) 教材(開発教育関連学習)を通じて、支援のありかたについて考察し、持続可能な社会づくりに関わる課題を見つける【多面的総合的に考える力】
- (ii) 主体的に世界のために活躍する人材について知り、自らのキャリアプランにも言及した内容を生徒同士で発表をし、他者の意見に耳を傾ける【コミュニケーションを行う力】
- (iii) JICAを通じて世界で活躍する日本人の声を聞き、自分のキャリアについて具体的に考えて、自らの未来像を描き、そこに到達するためには今、何が必要かを考え実行に移そうとする【進んで参加する態度】
- (iv) 開発途上国の諸問題を地球規模の課題(グローバルイシュー)としてとらえ、解決の手立てに目を向けて、改善策などを立案する【つながりを尊重する態度】

3-② ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・国際協力や開発途上国での暮らしについて理解するとともに、そこでできる支援について理解を深めた上で、「支援すること」とは、互いに働きかけ、さまざまな事柄が関わりあっていることを知る(相互性)
- ・JICAの持続可能な支援に向けたビジョンについて青年海外協力隊員の声からヒントを得る(有限性)
- ・持続可能な社会の実現のために、日本が国際社会で重要な役割を果たしていることを知る(責任性)

4-② 単元の指導について

(1) 教材観

『現地のニーズにあった支援とはなにか』という発問が中心である。モンゴルに派遣されている青年海外協力隊員の声聞き、キャリアを考える一助とする。研修中に撮影した現場の写真や動画で学びに臨場感をもたせる。既習事項として9月のコミュニケーション英語Ⅰの授業実践および同月下旬の飛翔祭(文化祭)での発表展示+11月の総合的な学習の時間(青年海外協力隊ストーリーその1)と12月の実践まで数回積み重ねがあったため、学びに連続性が生まれスムーズな授業展開となった。

(2) 生徒観

生徒には9月のコミュニケーション英語Ⅰにおける授業実践・同月の飛翔祭(文化祭)での発表展示において、モンゴルという国の概要・日本と開発途上国の相互依存の関係など、多角的に学び、意見を発表しあったり、話を聞いたり展示を見たり、自ら調べたりする過程で感想文やアンケートを実施した。それらの一部から、「キャリア教育と関連させてほしい」「もっと青年海外協力隊の活動が具体的に知りたい」という好奇心が生徒たちから自発的に出てきたほど、意欲的に学びを深めている。

(3) 指導観

キャリア教育については、4月当初から継続した学習を展開しており、進路部と学年が連携して授業を構成し、「進路の手引き」を用いたり、先輩講話を実施したり、班活動にて意見交換をしたり等の積み重ねがある。更に11月の総合的な学習の時間の単元においては、「青年海外協力隊ストーリー」という外部講師の授業があった。そのため、1学年のうちから高校卒業後の進路選択を考えることが身についている生徒も多く見受けられるので、12月には、実践として“青年海外協力隊隊員の活躍の紹介+継続的な支援のあり方”を中心にした学習を行い、青年海外協力隊ストーリーその2と位置付けて生

徒のキャリア教育の一助となるよう授業の目標を定めた。

5-② 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	国際社会の一員として当事者意識をもつことができる。	相手のニーズを理解しよりよい支援を考えることができる。	めあてを明確にして話しあい活動を進めることができる。	青年海外協力隊についての確に理解できる。
評価方法	態度・発言	話し合いでの発言	プリントおよび発言	プリントおよび発言

6-② 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	【青年海外協力隊ストーリーその2】青年海外協力隊の声を聞こう	現地にて活躍する日本人の生の声を聞き、国際協力について理解を深める。	国際貢献のあり方を模索し、日本の援助活動について理解し、適切な支援について考えを発表する。
2	フォトランゲージ	写真を使い背景にあるものなどに目を向け考える。	前回学んだ「現地のニーズにあった支援」について、意見交換をする。

7-② 授業事例の紹介

小単元名【青年海外協力隊ストーリーその2（教師海外研修を通じて見たモンゴルの現状と課題）】

(1) 指導案

(ア) 実施日時 12月24日(水)第3限 他

(イ) 実施会場 LL 教室

(ウ) 本時の目標 国際貢献のあり方を積極的に考え、主体性をもって自らのキャリアを考える。

(エ) 指導のポイント 視野を広め開発途上国への関心を一層高め、自分たちにできることを模索させる。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	導入1 導入2	・9月の授業の振り返り ・フォトランゲージ 1 体育指導をしている隊員の姿 2 体育館の床 3 首都と地方の道路の違い等	TT・講義＋話し合い	・各学級から集めた授業の感想文の内容共有 キーワードをおさえる。 『現地のニーズ』 『国際協力』 『自らの生き方・あり方』	・姿勢 ・発言 ・ワークシート記入 ・話し合い活動 ・発表活動 ・知識理解の定着度 ・学習活動の観察 ・授業に対する参加意欲
展開 30分	1 ワークショップ形式の教材 2 JICAの活動 3 青年海外協力隊についての理解深化 ・幼児教育の現場 ・体育指導の現場 ・環境教育の現場	・支援をする前に考えるべきこととは。 1 ワークショップ活動…話し合い&まとめ・発表 映像を視聴して自らの考えをまとめ、発表する 1 活動映像の視聴 2 異文化の地域で活躍する青年海外協力隊のインタビューを聞き、メモを取り感想をまとめる。(体育指導の現場)			
収束 15分	まとめ・ふりかえり 次時の予告	・感想を述べあう中で互いに国際教育について考えを深める。 ・3学年時に行う“異文化理解”の授業内容について、紹介をする。		・次時以降も教科書の単元に出てくる開発途上国での青年海外協力隊について取り上げること予告する。	

授業の様子



(左) 前授業の振り返り

(中) ゲストティーチャーの紹介

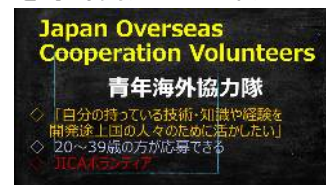
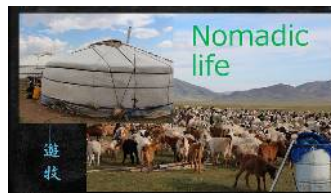
(右) 感想の記入

(2) 授業の振り返り

9月の授業実践と飛翔祭(文化祭)での展示発表の振り返りなどに基づき、PDCA サイクルを意識して12月の授業実践につなげた。どちらも授業のねらいの設定を明確にめあてを授業冒頭で伝え、見通しをはっきりもたせることとし、国際協力の本質を問うことをねらいにした。限られた時間内では触れることができなかった内容については、今後のコミュニケーション英語Ⅰの授業内でも、それ以降でも少しずつ紹介をし、その都度ふりかえりカードを記入させたり、ノートへ感想を書かせたりすることで、学習状況を把握していく。担任している1学年外国文化コースの学級においては、さらに積極的な関わり方が可能であるので、今後は折をみて発信を続けていく予定にしている。

(3) 使用教材

スライドの一部(効率的かつ効果的に伝えるため、スライドとプリントを毎時間用意した。)



(4) 参考資料等

- ・『モンゴルの子どもたち(世界の子どもたちはいま)』 西村佐二 学習研究社 (2002)
- ・『もっと知りたい国 モンゴル』 西村幹也 心交社 (2009)
- ・『モンゴルを知るための65章【第二版】エリア・スタディーズ』 金岡秀郎 明石書店 (2012)
- ・『図説 モンゴル歴史紀行』 松川節 河出書房新社 (1998)
- ・『地球の歩き方 モンゴル』 地球の歩き方編集室 ダイアモンドビッグ社 (2013)
- ・『夢と希望の大国! モンゴル(コミュニティ・ブックス)』 タシツトング ケレルマ 日本地域社会研究所(2013)
- ・“Lonely Planet Mongolia”(英語) ペーパーバック Michael Kohn Lonely Planet (2011)
- ・『隊員たちの声』制作 教師海外研修(首都特区バガノールでの体育指導)(2014)
- ・『世界の食卓 世界24か国の家族のごはん』TOTO 出版 (2012)
- ・『開発教育実践ハンドブック 参加型宅習で世界を感じる』NPO 法人 開発教育協会 (2013)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

モンゴルの衣装や音楽・飲み物、食べ物をはじめでの生徒が多く、現地で入手した教材の活用が非常に効果的で、具体物を介したことで異文化理解をさらに深めていたのが印象的である。また受動的なだけでなく、アクティブに班活動をし、活発な意見交換等を通し、自分たちで考えたり、感じたことを言葉で相手にわかるように発信することの楽しさを体感していた。高校生の自分たちにできることを考え、主体的に行動しようとする姿勢をもつ者が増えた点が変容と言える。特に、高校生である自分たちに年齢の近い海外協力隊員の声を聞き、意見交換をする活動を入れたことにより、自分自身のことに置き換えて意識をもって授業に参加している生徒もいた。今回はモンゴルという近くて遠い国を題材としたが、今後使用する英語教科書の中でも、様々な国が取り上げられることが予想される。そうした中で、教科横断的に物事を考え、開発途上国だけでなくその他の国々に対し、何か自分たちでできることを思考し、模索していくことこそが本当の国際理解教育／開発教育につながると実感することができた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

●全体の成果

「JICAの支援を持続させるためには、一つの方法として青年海外協力隊という形で自分たちにもできることがあることが分かった」「国際社会の一員としての自分自身のあり方を見つめることができ、将来のことを考えて今行動することが大切だと改めて感じた」等の感想が聞かれ、国際協力をより身近に捉え、

一歩を踏み出そうとするきっかけとなったようである。授業をする側としても、どんな題材でも伝え方を工夫することで深く考えさせることができるという経験ができた。日本に目を向けた生徒も見受けられたので、今後の授業実践においても、国内国外問わず相互に win-win な関係の構築をどのようにしていったらいいか、自分たちにできることはなにか、どうしたらより有効かの意見交換等を行っていく。

●課題および課題の改善策

P<計画>

・学習計画を立て、授業のねらいを明確にし、TT で展開する場合には綿密な打ち合わせのもと指導案を作成した。

・3 学年での『異文化理解』の授業を見通して、次年度以降の授業においても日々の学びの中で、「国際理解」というキーワードに対して、今回の体験を含め、広い視野から伝え続けることを計画している。

D<実施>

・ねらいを達成するための一つの方法として、開発途上国と日本の違いに目をむけ、課題をしっかりとらえることができるようスライド・動画・拡大写真等を用いた。

・具体的な現地の様子や JICA に携わる人々の話を盛り込み、生徒の反応・理解の状況を見ながら、授業を展開した。

・授業を TT で行う際、各教員が意見を出し合ったり、改善策を話しあったりして、常に振り返りながら進めた。

C<検証>

・事前事後アンケートを行い、授業中もワークシート等のみとりを行い、理解の状況をこまめにチェックした。

・自己評価を行うことに加え、他の教員から意見・助言を聞き、次の授業では改善するようつとめた。

A<改善>

・時間数確保および、考査等にむけての授業進度の兼ね合いが懸案事項であったが、授業時間内で伝えきれなかったことは、学級担任をしているクラスの生徒に対してはホームルームの時間を通じて伝える機会を設けることが何回かできた。他の学級においてはそれも実現できないと予測したので、9 月末の飛翔祭(文化祭)において発表する場を設け、全校に発信することとした。

・授業時間の捻出については、課題を多く抱えているものの、研修で得た内容を生徒にぜひとも還元したいという気持ちが強く、担任している学級内においては、教室後ろの黒板および掲示板にモンゴルコーナーを設け発信を続けた。他教科との横断的なつながりの方法も模索し、11 月の総合的な学習の時間における学びを一層深めるため、12 月に 11 月の学習内容の第二弾という位置づけで授業を実践し、キャリア教育と関連させたり、ボランティア活動について考えを深めたりし、全体的なまとめを行うことができた。なお、PTA 発行の本校ニューズレター(No.78)にも今研修のコラムを掲載してもらうことができ、あらゆる場面で研修内容を還元していく方法にも挑戦することができた。

・1 学年 5 学級のうち外国文化コース 2 学級でのみの実践となった授業もあったので、意見の多様性に欠けたので、3 学期に普通科でも行う予定としている。

10 教師海外研修に参加して

国際理解教育・開発教育のねらいをポイントを絞って理解することができたとともに、ESD(持続可能な発展のための教育)の授業の構成の仕方や手順・教材集めのポイントなどについて仲間やアドバイザーの先生と意見交換する中で深めることができた点が大変有益であった。ESD(持続可能な発展のための教育)の視点を持ち、学習過程で、生徒間でコミュニケーションをとり合い、互いに意見を共有し合う場面を多く設けるという一連の流れは、今後のあらゆる単元の授業展開にも応用がきく手法だと感じる。

国際理解教育・開発教育は、国際社会を生き抜き次代を担う生徒にとって、彼らの主体性を高め、自ら考える姿勢をもって、国際貢献を果たしていく素地を養うために必要不可欠な内容であると思う。

今研修は、多岐にわたる充実したカリキュラム内容での学びに加え、一人では調達できなかった教材や今回の実践で使用した動画収録・動画編集など、生徒に還元するためのさまざまな手段についても仲間とアドバイザーの先生と話し合い、意見交換をし、使用教材の精度を高めることもでき、授業実践へのイメージをふくらませることができた。

「百聞は一見にしかず」ということばの通り、実際に見て体験し、経験したことを語る授業においては、生徒の反応も普段の様子とは違って見え、興味関心を高めることができたように思う。時間的制約などもあるが、それらを超えていかに工夫して、生徒にわかりやすい形で還元するか、というあつい気持ちをもって授業実践に臨むことができ、学びが非常に多かった。今後は、勤務校において積極的に国際理解教育を担っていきたいと考えている。